

一第50編 一 珠玉の村役場

G・アスブルンド^{*1}と並んで北欧を代表する近代建築家アルヴァ・アアルトは、1920年代から1970年代に至る半世紀の間、実に多作であった。ヘルシンキだけでもデビュー^{*2}から含めると、大変な数に上る。しかし、敢えてベストを挙げると言われれば、私は迷うことなくこのセイナツツアロ^{*3}の役場を推す。少年時代を過ごし縁の深いユヴァスキュラ^{*4}にもいくつかの作品を残しているが、1952年に完成したこの役場には、彼の計画家、設計者、デザイナーとしての力量が凝縮されている。

初期の作品はユヴァスキュラの労働者会館などに代表される新古典主義に基づく作風であったが、同時期に設計されたトゥルン・サノマト新聞社から、モダニズムの作風へと転じた。これがさらに顕著なものとなったのが、



写真50-1 セイナツツアロの役場中庭



写真50-2 入口周り

*1
Eric Gunnar
Asplund (1896-
1940)

*2
Alva Aalto
(1898-1976)

*3
Säynätsalo

*4
Jyväskylä: フィンラ
ンド中央スオミ県の都
市。人口約13万

*5
Congres
International de
l' Architecture
Moderne

1928年に行なわれたコンペで一等を獲得したパイミオのサナトリウムであった。この建築は北欧においてモダニズム建築が台頭するきっかけになった作品の一つであり、アールトが国際的な建築家として知られる出世作となった。また、同時期にCIAM^{*5}(近代建築国際会議)の終身会員に選ばれ、ワルター・グロピウス^{*6}、ル・コルビュジェらと知己になつた。そして、人間的な近代建築を生み出すことに生涯をかけた。

ケネス・フランプトン^{*7}はサユナツツアロ(セイナツツアロ)の役場(1952)の赤レンガについて、「そこには普遍テクノロジーへの抵抗と触覚的素材の使用によつて効果的となる目論見がある」と論じた。階段室壁面のざらざらしたレンガ壁面と議会室木床の

撓みの対比に見られるような目論見である。フランプトンによれば「批判的地域主義」は、近代建築が持つ普遍的・進歩的特質を取り入れるべきだが、それも批判的に、そして同時にその建物の地理的文脈に価値を置くべきものとされる。そこで強調されるべきは、地理(地勢)、気候、光であり、

背景(つまり絵画的な情景)より形態であり、視覚性より触覚性である。

この役場は、まさにその代表例として語りかけてくるのである。



写真50-3 議場に誘う階段



写真50-4 会議室内部

*6
Walter Gropius
(1883-1969)

*7
パウハウス創立者初
代校長

*7
Kenneth Frampton
(1930-) 英国生
まれの建築史家

*8
Critical
Regionalism:
1980年代初頭に現
れた、近代建築におけ
る場所性の欠如を、地
理的文脈を通して克服
しようとする建築のア
プローチ